



オネシヨタ保健室

〜三十路処女養護教諭の

筆おろしから妊娠の

出産までの
ヒストリー〜

オネショタ保健室～三十路処女養護教諭の筆おろしから妊娠出産までのヒストリー～

弾

同人サークルぶるずあい

表紙・挿絵 藍川ナンデス

目次

プロローグ

7

三十路処女オナニー

12

オネはパイズリでご奉仕

18

体験版後書き

29

プロローグ

僕は香澄先生が好きだ。香澄先生とは花楓香澄かえでかすみという可憐な名前をした保健室の先生だ。

「悟君さとる、お茶にしよっか」

「は、はい」

僕は最近、上手くクラスに馴染なじめず、保健室登校をしている。

引きこもるほど悪い感じじゃないんだけど、担任の先生の妙に体育会系なノリについていけない。

今日は穏やかな日和ひよりでお日様が温かい。何だか眠くなりそうな日だ。

保健室は独特の消毒液のような香りが微かにする。几帳面な香澄先生の手によってお薬や包帯ばんどう、絆創膏ばんそうこうなんかが整然と棚に並ぶ。

「今日はちよつと良い紅茶にしてみました。みんなには内緒よ」

人差し指を立てて唇に当て、シーのポーズで香澄先生は笑う。

紅茶の匂いに混じって先生の良い匂いがした。フローラルシャンプーの甘い香りに、柑橘かんきつを思わせる爽やかな香水の香り、微かにチーズのような匂いがして、本当にドキドキさせられる。切れ長の目に整った鼻と口元、長い黒髪をポニーテールにしている、その髪は宝石を溶かして作ったみたいに綺麗きれいだった。



大きな乳房が軽い動作のたびにプルンと揺れて、本当に柔らかいんだと思う。お尻も大きいんだけど、ウエストは蜂はちみたいにくびれてる。脚が凄く長くてモデルみたいなんだ。

「どう？ お茶美味しい？」

一口紅茶を飲んだ僕を見て、香澄先生がそう訊きねてきた。

僕はココクと頷うなずく。正直言えば、先生に見惚みとれていて、お茶の味はよく解らなかつた。

「お砂糖とかあまり食べると太っちゃうから、お茶うけはプレーンのクラッカーだけど、悟君はジャムを付けてね」

香澄先生がいちごジャムを付けたクラッカーを僕に渡してくれた。このジャムも手作りでもとても美味しいんだ。

「かつ、香澄先生は男性と交際とかしてるんですか？」

「んふつ、何それ？ そんなことが気になるの？」

香澄先生はニコニコ笑っている。僕は決死の思いで言った言葉だけど、香澄先生はただの世間話くらいにしか思っていないようだった。

「うくん、まあ、悟君になら教えてもいいかしら……その前に君はどう思うの？」

「は、はい……香澄先生は凄く綺麗だから、仕事が出来てお金をいっぱい持つてる恋人がいるんじゃないかと思えます」

カチコチに緊張しながらなので、声が震ふるえてしまった。

「ごくんねん、ハズレ♪ 先生には恋人はいません。男の人の収入にも興味はないわね」
「そつ……そうなんですか」

とりあえず一安心して、僕は胸をなでおろした。

「ふくん……もしかして悟君は先生のこと好きなの？」

「えっ!! は、はい……」

核心を突かれて僕はドキリとした。

「せ……先生は僕の初恋の人です」

「まあ……嬉しい」

先生がふんわりと優しく僕を抱きしめてくれた。甘い匂いがする。そしてほんのり温かい。

「せつ……先生っ!」

これがチャンスとばかりに僕は先生の背に手を回し、その胸に飛び込んだ。

「可愛い子ね……そくれパフパフ♪」

先生の胸に文字通り顔が埋まる。

「わ、わ……い、息が」

なんてポリウムがあつて柔らかいおっぱいなんだろう。僕は感激かんげきしてしまった。

「本当に嬉しい……けど、悟君と先生は親子ほど年が離れているのよ。せめてもう十年早く

生まれてればね……」

先生がしょんぼり言うものだから、僕もしょんぼりしてしまった。

その後は軽い世間話をして、僕は下校した。今日のおっぱいの感触は一生忘れない。

三十路処女オナニー

『せ……先生は僕の初恋の人です』

そう言った悟の言葉が心の中で何度も木霊する。

香澄は自室のベッドに転がり、枕に顔を埋めた。パジャマ姿の香澄はすつとパンツを下ろしショーツも下ろした。

がらんとした静かな部屋で、一人悶々と性欲をたぎらせていた。

——あはっ♡ 子供の告白で子宮が降りちやうなんて、私……そんなシヨタ好きのつもりはなかったけど。

自分を見つめる真剣な表情の悟を思い出す。

子宮がきゅくと痛み、卵巣がムズムズする。

——いい加減、私も欲求不満なのかしら？

悟と出会う前の香澄は、性欲というものをほとんど感じたことが無かった。

言い寄ってくる男は無数にいたが、なんとなくの嫌悪感から、全てぶった切ってしまった。

おかげで今年三十になるまで処女だった。

その名器であるが使われてこなかった膣には指さえ入れたことは無い。

たまに何かの間違えでムラツと来た時は、クリトリスを軽く転がせば治まった。

——悟君……可愛い、可愛い、可愛い。

あのつぶらな瞳は小動物を思わせる。今はまだ芽吹いたばかりの天使のような容貌だが、あれは将来アイドル並みのイケメンに化けるだろう。

仰向けになって、深呼吸する。右手が自然と股間へ行つた。

——ああ、……もう濡れてる。

膣口から愛液が滴したつていた。指に絡めて眼前へ持つてくると、人差し指と親指の間に糸が引いた。

甘い愛液の香りに微かにチーズのような匂いもする。香澄の処女臭だ。

——ちよつと臭いかしら？ でも、他人と比較なんかできないものね。

少し思案して、考えるのを止めた。自分はいつてもアソコを綺麗に洗っている。たしかに処女膜に守られた膣の中までは洗えない。でも何となくこの膜を傷つけることは躊躇ためらわれた。

——いつその事、この膜を悟君に破つてもらおう……。いつ！ いけないわっ！

想像した瞬間、子宮に甘い痛みが走った。心臓がドキドキ鳴る。その脈動みやくどうのたびに子宮がキュンキュン疼く。今すぐ膣奥をグリグリと責められたい衝動にかられる。

ツプツといつの間にか人差し指が膣にもぐり込んでいた。

——あつ、処女膜が♡……。

その膜は簡単には破れなかった。探ってみると真ん中に小さな穴が一つ開いていた。

——指……一本なら、入っちゃう♡。

生まれて初めて触った自分の秘部は不思議な感触がした。愛液で潤うるおっているせいかヌルヌルする。ヒダがみつしりしていて、微かにうごめいている。

——意外に複雑な形……男の子はこれが気持ち良いのかな？

その膣ヒダは熟れた熟女のもので、柔らかく優しく粘り付く。しかもこの膣洞は男を知らぬ処女。絡み熟女で締めまりが処女の一晩だけ無敵になるシンデレラの名器だった。

——あつ♡……ここが気持ち良い♡。

膣口に指を少しだけ沈めたお腹側に特にツブツブのはつきりした所があつた。♡スポットだ。そこを人差し指でこすったり伸ばしたりすると、目の前に火花が散った。

「あつ！ やんつ♡ イクイクイツちやうううん」

生まれて初めての膣イキは電光石火のようだった。男なら早漏もいいところだ。溜まりに溜まった性的欲求不満が一気に弾けた。

それでも……。

——ああ……子宮がもどかしいわ。

初めての膣イキで女の欲望が目覚めてしまった。そう遠くないうちに処女喪失しなければ、

バイブレーターを入れなければ満足できない身体になるだろう。

——悟君♡……悟君♡……。

シヨタの童貞を奪うことを想像しながら、〇スポットを何度もこすった。

「イクツ♡！ イクツ♡！」

プシツプシツと潮が吹く、確かに〇スポットは気持ち良く、感じるのだが、絶頂のピークには届かない。

——やっぱり……オナニーじゃダメなんだわ。

でも、今はこの発情した身体を何とか静めなければならぬ。

——あんまり無理すると処女膜が……ここはクリトリスを転がすしかない……わね。

指を膣から抜く、そこで香澄は驚いてしまった。白い白濁した液体やカスが指に付いていた。白い液は子宮頸管粘液でカスはバージンチーズつまり処女の恥垢だ。

——こんな白いの出たことないわ。子宮のせい？ このカス少し臭い。

しかし、香澄は処女だ。健診も受けているし病気ではないはず。

——昔レディコミでみた本気汁ってやつかしら？ 悟君をオカズにオナニーしただけなのに。

こんなに違うんだ。

クリトリスを転がして、今度はクリイキを何度も極めた。

——ああ……クリトリスも普通の何倍も気持ち良い♡……。



理性は悟との歳の差を気にしている。まだ精通したかどうかさえあやしいシヨタつ子に発情してゐる自分が恥ずかしいという気持ちは確かにある。しかし香澄は間違えなく悟に恋していた。悟は自分の肉体をどう思うんだろう？ と考えた。香澄の胸は大きい、大きすぎると言つてもいいくらいだ。先の保健室でのパフパフの様子を見る限り、悟は香澄の巨乳に好感を抱いてゐるように見えた。

——太つては……いないし、でも二十歳の頃よりちよつとふくよかよね。今すぐ十代に戻つて悟君と恋人になりたいわ。

「あつ♡ あんつ♡ 気持ち良い、わたし、シヨタつ子オカズにオナニーしてる悪い先生です。悟君の肉棒が欲しいのつ♡！ 処女の膣をぐちやぐちやにかき混ぜてほしいつ♡!!」

言葉に出すと異様に昂つた。目の前がぱあつと白くなり、ものすごく幸せな気分がした。甘い砂糖菓子のようなクリトリスオナニーの絶頂だった。

「はあ……はあ……はあ……」

まだ身体は熱く火照つている。残り火のような子宮の痛みもある。でも、とりあえずは落ちて着いた。

「悟君……」

この恋はそう簡単には叶わない。そうであっても彼の初恋に報いて、身体を許しても良い。そう思えた。

オネは。パイズリで。ご奉仕

「悟君……大丈夫？ 顔が少し赤いわね。熱は……ちよつとだけ高い？ 風邪かしら」

まだお昼前の保健室、今日も香澄先生と二人つきり。もし他の誰かがいたら本気でピンチだった。

うう、く、苦しい。オチンチンが熱い……。でも、これって相談してもいいのかな？ なんか悪いことのような気がする。

そう、僕はいつもの保健室登校で漢字ドリルをやっていたんだ。調子は悪くなかった。途中までは。

香澄先生が僕の書いた字をチェックしようと屈んだんだ。その時に先生のおっぱいの谷間が見えちゃったんだ。

ドキンと心臓が鳴った。まず顔が赤くなったみたいで、ちよつと熱くなった。そして……。オチンチンが凄い勢いで膨らんだ。たまらず僕は前かがみになって、ベッドに潜り込んだ。

「へ、……平気です。たぶん軽い風邪です」

「そう？ 何か隠してない？」

すつ、鋭い！ さすがに一年以上の付き合いがあるから、香澄先生は僕のことよく解っている。

「どこか痛いの？」

確かに小さなパンツに収まりきらなくなったオチンチンが痛いけど、僕は必死に耐えた。でも、また香澄先生は屈んで僕の顔を覗きこみ、そしてまたおっぱいの谷間が見えた。

ふんわりと良い匂いがする。甘いんだか凄く美味しそうな匂いだ。

「うう……」

治まれ、治まれ、そう念じていると余計におっぱいが気になった。

「お腹が痛いのかしら？ よく見せて」

ああ……駄目だっ！ 掛け布団をはがさないで。

僕の祈りは空しく、香澄先生はかぶっていた布団をはいだ。

「ただお腹が痛いだけでも、重大な病気の前兆ってこともあるの。安心して先生に見せてもらいなさい」

香澄先生は優しくそう言つて、僕のお腹を触ろうとした。そして……。

「まあ、これって……」

香澄先生が僕の股間にできた大きなテントを見つけて目を丸くした。うう……恥ずかしい。

「これを隠そうとしていたの？」

香澄先生の声は優しい。

「こ、これって何でしょう？ 悪い病気ですか？」

「これは性器が勃起しているだけよ。悪いことでもなんでもないわ」

「性器……勃起？ でも、これ苦しいですよ」

熱くて疼いて、なんか変な気分だ。

「あんまり勃起しっぱなしでも、良くないわね……一本抜いた方がいいかしら」

「抜くってオチンチンを抜いちやうんですか？」

僕は恐ろしい想像をしてしまった。火照った顔から急に血の気が引いた。

「違う、違う、そんな怖いことするはずないじゃない、抜くのは精液よ」

「せ、精液？ 注射ですか？」

精液って聞いたことのない単語だ。

「あははは、面白いわね悟君は、君はオチンチンから白い液体を出したことはないの？」

「な、ないです……出るんですか？ そんなもの」

「あはつ、精通前だったんだ」

香澄先生の瞳がキラリと光り、ペロツと舌なめずりをした。それが凄く色っぽくて、僕はドキリとした。

☆☆☆

——精通前のシヨタつ子なんてステキ。私が射精を教えるんだ。

そう思うだけで心臓は早鐘はやがねを打ち、子宮がキユウツと疼いた。

「悟君、怖がらないで、これからあなたのオチンチンを治療します。痛いことは何もしないから……先生に任せて♡」

悟はコクコクと何度も頷く。

「まず、先生のどこを見てこうなっちゃったの？」

「そ、その……おっぱいです。ごめんなさい」

「謝ることなんて、何も無いわ。それは男の子なら自然なことよ」
怖がらせないようあくまで優しく、ゆつくりとしやべりかけた。

「まずはそこを見せて」

そう言つて悟のズボンを下ろし、ブリーフも下げた。

「まあ、凄いおつきなオチンチンね」

ボロンとまろびでたそこは、子供とは思えない太さと長さをしていた。

「やっぱり変なんですか？ 僕のオチンチン」

「いいえ、ステキなオチンチンよ」

龟头の色を見るかぎりまだ仮性包茎のようだが、勃起した龟头はカリ高だった。

——これ私でも子宮まで届くわね。

さつきからキュンキュンキュン子宮がうるさい。

「悟君がおっぱい好きなら、先生がおっぱいでしてあげるわね」

香澄は白衣を脱ぎ、シャツを脱いで上半身裸になる。こぼれるように現れた白いおっぱいは大きく、十分に悟の逸物を包めるサイズだった。

☆☆☆

わあ、凄いつ！ 綺麗なおっぱい。誕生日のケーキみたいにな敵だ。

「せ、先生のおっぱい……綺麗です」

「そう、ありがとう」

香澄先生が普段でもあまり見せないような、凄く良い笑顔で笑った。僕も嬉しくなる。「おっぱいですって、何をするんですか」

「まずはベッドの端に腰掛けて……そう、オチンチンを突き出してみなさい」
僕は言われた通りにする。オチンチンが凄く目立って恥ずかしい。

「先走りの汁が出るわね」

そういつて香澄先生は僕のオチンチンの先っぽを指ですつと撫ぜた。

「ううっ」

それだけでちよつと気持ち良くて、声が出てしまった。

「ほら、見てごらんなさい」

香澄先生が人差し指と親指をくつつけて、離して見せる。納豆みたいに糸を引いていた。

「うん、青臭くて活きのいい我慢汁ね」

「それ……おしっこじゃない？……ですか？」

「そうよ。男の子はエッチなことを考えたり、オチンチンを気持ちよくされると、お汁が出ちゃうの」

香澄先生はちよつと恥ずかしそうに微笑んだ。うわっ！ 凄い綺麗だ。女神様みたいだ。図書館にある神話の漫画に出てくるような。

「その汁を抜くんですか？」

「まあそうね、見てなさい」

香澄先生が僕の前に屈み込み……おっぱいで僕のオチンチンを挟んだ。

「うわっ！ ううっ」

気持ち良い、それだけじゃなくて、凄くびっくりした。なんて刺激的な姿なんだろう。

「こうやって、おっぱいで擦こすって……初めてだから、上手くできると良いんだけど」

「す、凄い気持ち良いです」

香澄先生が上手に僕のオチンチンをしごきあげていく、はじめは僕のオチンチン全部が挟まっ

ていたけど、そのうち先っぽが顔を出した。

「んふっ♡ 可愛い亀頭ね♡」

香澄先生がちゅつと吸いついた。すると、僕のオチンチンがとてつもなく気持ち良くなる。

「あっ……駄目です香澄先生っ！ うっ、うううっ！」

オチンチンの奥にマグマみたいに熱い何かがこみ上げてきた。

「悟君……イキそうなのね。我慢しないで、気持ち良さをそのまま受け入れて」

「ううっ……くうう」

オチンチンが僕の意思に反し、ビクンビクンと跳ねる。それはまるで制御が出来なかった。

「だっ駄目だっ！ 何か来ますっ！ ああっ……香澄先生っ！」

まず一筋、びゅうつと白い線が出来た。香澄先生の顔に当って弾ける。

それから……。

「それっ！ もっともっといきなさいっ！ 先生のおっぱいで気持ち良くなりなさい」

ビクンビクンとしていると、おっぱいでしごかれると、目の前に火花が散り、物凄く

気持ち良い。

びゅっびゅるびゅるっ！ どびゅっ！ どびゅうううっ！！

お漏らししたときなんて比にならないくらい、凄い勢いで僕は白い液体を撒き散らした。そ

れは香澄先生の顔に当たり髪に当たり、おっぱいの上にこぼれた。



気持ち良さで目の前が真っ白になった。

「はあ……はあ……はあ……」

香澄先生は僕のオチンチンの痙攣が次第にゆっくりになるのをじつと見ていた。

「ごっ……ごめんさい……先生にいつぱい付いちやった。これが精液ですか？」

「そうよ♡ 精通おめでとう♡ もう、子供じゃないのね♡」

香澄先生は顔やおっぱいに付いた僕の精液を指ですくって舐めた。そして、ゴクンと飲み込んだ。

うわあ……すごいエッチ……そうだエッチだ。この感じがエッチなんだ。

「そ、それって食べられるんですか？」

「悟君にはあげないわよ。シヨタつ子の精通精液なんて、味わえる機会はそうそうないし……じゃあお掃除フェラしてあげるわね」

香澄先生はそう言つて、先ほどよりはだいぶ勢いがなくなつた、僕のオチンチンに付いていた精液を舐めて、中に溜まつていた精液もちゅつと吸い出して飲んだ。

☆☆☆

——ああ……教えちやつたんだ。悟君に射精を……。

恐ろしく濃くて、ドロドロの精液だった。しかも精通したての精液なのに女を孕ませることの出来る精液だと、香澄は直感でわかった。

精液は勢いよく香澄を汚した。髪にもついてしまったし、胸にも大量にこぼれた。一滴胸に落ちた精液を指ですくって舐める。濃厚な栗の葉の匂い。

——ああ♡ これ、子宮に欲しいわね♡。

子宮が痛いほどにしこり、ずり下がった。

——でも……さすがにエツチは……まだ子供だし、発覚した時に言い訳ができないわ。

「気分はどう？ 勃起は治まった……みたいね」

「はっ……はい、これが射精ですか……凄い気持ち良かったです」

「悟君だから、特別に先生が抜いてあげたの。このことはお父さんやお母さん、クラスの友達にも教えちゃダメよ」

「はっ……はいっ！ 香澄先生と僕だけの秘密ですね」

「そうよ。秘密ね、本当は先生は子供にこんなことはしちやいけないの。バレたら先生を辞めさせられるかも」

「そっ……それは困ります。そうですか……こんな気持ち良くてステキなことなのに悪いことなんですか？」

「くす……」

香澄は微笑むと、悟の頭を撫ぜた。

「この行為自体はステキなことよ、もちろん悪いことじゃない。悟君のご両親もこういう事をやって、悟君を産んだの。でも先生と生徒はしちやいけないの。わかった？」

悟は小さく頷いたが、その表情は納得できていないように見えた。

——体験版お終い

体験版後書き

こんにちは、弾です。この度は当サークルの作品を読んでもいただき、誠にありがとうございます。また、誠にありがとうございました。

久しぶりの小説同人誌で、イラストは前作『催眠男！』と同じく藍川ナンデスさんです。今回はクールな養護教諭を描いてもらいました。

完全版は処女喪失に加え妊娠出産のシーンもバッチリ描いてもらっています。よろしかったら完全版のご購入を検討していただけたらと思います。

完全版は税抜き二百円ほどの予定です。

沢山売れたら本当に嬉しいのですが、昨今のエロ同人の競争激化に加え、売上げが上位の作家さんに独占され、僕のような泡沫な作家には同人ドリームは遠いところの出来事です。

今後も無料や有料問わず、色々な作品を書いていきたいと思っています。

皆様の応援は本当に作品作りに影響を与えます。有料の作品を買ってもらうのも凄く助かります。連載小説のブックマークやいいね、ブログの応援クリックなんかも本当に励みになりますので、よろしければぽちっといただけますと光栄の極みです。

そんな感じで今後も創作を続けていきたいと思っています。また次の作品でお会いしましょう。

—
お
終
い。
—

2024年 5月31日 初版

奥 付

発行 同人サークルぶるずあい

著者 弾

URL <https://bulls-ai.just-size.net/>

E-Mail writer@sample.org

イラスト 藍川ナンデス

URL <https://www.pixiv.net/users/38844918>

E-Mail illustrator@sample.org

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)